

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12491

研究課題名（和文）古代日中写経関係史料の比較研究

研究課題名（英文）Comparative Study of Ancient Japanese and Chinese Documents and Manuscripts Related to the Sutra

研究代表者

矢越 葉子（YAGOSHI, Yoko）

明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員

研究者番号：30720156

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、古代の写経事業にかかる史料である日本の正倉院文書と中国の敦煌文書、またその写経事業によって形成された経巻群を比較検討することを通じて、史料群としての性格や成り立ちを究明しようとすることを目指した。正倉院文書と奈良時代写経の比較、敦煌文書と敦煌遺経の比較についてはこれまでに先論もあったが、この二つを組み合わせることで、古代の経巻書写の場で行われていた作業工程の差異の一端を明らかにすることができた。さらに、各地に残る奈良時代経巻の調査を通じて、正倉院文書を形成した東大寺写経所で書写された経巻を新たに数点見出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

正倉院文書は写経事業に伴って形成された史料群であるが、近年、その事業によって形成された経巻群との比較研究が盛んに行われている。これを敦煌文書・敦煌写経に応用し、正倉院文書・奈良時代写経との比較を行うことで、日中において作業工程の一部が異なった形で実施されていることが判明した。写経事業やその工程は日本において独自に創出されたものではなく、同時代の中国および朝鮮半島の影響を受けて始められたものであることから、その継受の過程で新たに生み出された工程、もしくは中国でも敦煌では失われてしまった工程と考えられる。このように写経工程全体の復原からしか把握できない情報を指摘しえたことが本研究の学術的意義である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the character and origin of the Shosoin and Dunhuang documents as historical archives related to the ancient sutra copying project through a comparative study of the document and sutra scroll groups. Comparisons between Shosoin documents and Nara-period manuscripts, and between Dunhuang documents and Dunhuang manuscripts, have been discussed in the past, but by combining them, I was able to identify some of the differences in the work processes carried out in the site of ancient sutra scroll copying. In addition, through research of Nara-period sutra scrolls remaining in various locations, I found several new sutra scrolls that were copied at the Todaiji sutra copying office, which formed the Shosoin document.

研究分野：日本古代史

キーワード：正倉院文書 奈良時代写経 敦煌文書 敦煌写経

1. 研究開始当初の背景

研究代表者が専門とする正倉院文書が光明皇后の皇后宮職系統写経機関(東大寺写経所)がおよそ半世紀にわたって形成した史料群であることは日本古代史の分野では常識となっているが、特に1980年代以降、文書目録および影印(写真版)の刊行が開始されたのを契機に、史料群を形成した写経機関に関する研究が飛躍的に進展した。また、聖語蔵経巻のカラーデジタル画像の公刊を通じて、経巻と正倉院文書の記述との比較研究が進展し、近年、特に宝亀年間に書写された一切経群が相次いで見出されている。

これに対して、中国の敦煌文書も、大部分については影印が刊行され、主要なものはオンライン(「国際敦煌プロジェクト(International DunHuang Project)」)で画像が公開されるなど、研究環境は急速に整備されている。また目下、中国が国家を挙げて実施している「一帯一路」政策のもと、歴史分野ではシルクロード研究に重点が置かれているため、多くの精緻な研究成果が挙げられている。しかし、敦煌文書を形成した写経事業そのものにかかる研究は少なく、史料群としての敦煌文書がどのような過程を経て形成されたのかといった根本的な問題に立ち返って検討することが必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は日中の写経関係史料である正倉院文書と敦煌文書を対象に、史料群としての形成過程において製作された経巻群と併せて検討することで、その史料群としての性格や成り立ちについて究明することを目的とする。

本研究の独自性は、正倉院文書とそれに対応する経巻については、画像資料を活用しつつ、「史料」としての正倉院文書と「資料」としての経巻の双方から宝亀年間の写経事業を捉え直すという点である。現在の研究では正倉院文書の記載との対応が認められる経巻についてのデータを蓄積する、いわば「史料」の側から「資料」を評価している段階であるが、評価された経巻のデータを蓄積していくことを通じて、この蓄積されたデータに基づいて「資料」の側から「史料」の欠損や不備を補うことが可能になるであろうとの見通しを持っている。

また敦煌文書のうち写経事業にかかる史料に基づいた検討は、近年では土肥義和「曹氏帰義軍後期、敦煌管内仏教教団の写経事業記録の分析—「敦煌遺書」の性格を探る—」がほぼ唯一のものと思われる。この土肥氏の検討においては当然のことながら正倉院文書の写経所帳簿に関する研究蓄積が生かされていないが、これを反映させることは敦煌で実施されていた写経事業の実態をより鮮明に浮かび上がらせることにつながる。また、敦煌文書の写経事業研究において経巻が活用されることもあるが、それは願文や跋文を用いたものであり、経巻の製作過程で施された記銘には全く言及されていない。ここに近年の正倉院文書研究で実施されている史料と経巻の双方に基づいて検討を行うという方法を導入することは大きな意味を持つであろう。

写経事業は日本において独自に創出されたものではなく、同時代の中国および朝鮮半島の影響を受けて始められたものであり、今日に残る経巻同士を比較することで、その受容の様子や作業の実態を明らかにすることもできるであろう。

3. 研究の方法

本研究では以下の手順を踏まえて、正倉院文書および敦煌文書の史料群としての成り立ちを究明しようと計画した。

- ① 正倉院文書のうち宝亀年間の文書群と経巻群の比較研究
- ② 敦煌文書中の写経事業にかかる史料と敦煌写経に施された記銘の比較研究
- ③ 日中古代写経関係史料と経巻群の比較研究

このうち①の経巻群の検討は、東大寺および東大寺図書館所蔵の経巻については既に着手し、一定の成果を収めている。他の機関が保有する経巻で、この宝亀年間に書写されたと思われるものについてはピックアップが済んでいることから、これを発展させる形で調査を随時行い、料紙の法量、貼り継ぎ方、筆跡といった基礎データを収集する。また宝亀年間の文書群は写経所の最末期のものであるため、膨大な点数に上ることから整理が進んでいないが、整理・復元を行い史料群として把握し直すことを目標とする。その際には公刊されている影印およびマイクロフィルムと対校することを通じて、記載されている文字情報を確定する。

次に②のうち、先に敦煌文書中の写経事業にかかる史料の特定とその検討を行うが、まずは公刊されている敦煌文書の影印をめぐって特定を行う。その上で、先学の指摘した史料も含めて、原本の調査を行い、テキストの確定とその作成過程を検討する。検討にあたって原本調査を要すると判断した史料については、所蔵先を訪れて調査を行い(申請時にはフランス国立図書館を予定)、テキストの確定を行う。この確定されたテキストを検討するに当たっては、先に述べた正倉院文書の帳簿にかかる研究蓄積を活用する。さらに②のうち敦煌写経に施された記銘の特定と史料群との比較に移るが、この経巻製作時に施された記銘は影印でもいくつかの事例が確認

できている。この確認作業を継続するとともに、経巻についても原本調査を実施する（申請時にはフランス国家図書館、中国各地の博物館や図書館を予定）。このようにして収集した経巻への記銘を帳簿群と比較することで、敦煌で行われていた写経事業の実際とその管理の実態を明らかにする。これは敦煌文書がどのような過程を経て形成されたのかという問いに対する答えにつながるものである。

そして最後に、③として日中の写経事業にかかる史料同士、経巻同士の具体的な比較検討を行う。この際に帳簿の様式だけでなく、各帳簿が果たしている機能に着目することで、日中で行われていた写経事業の共通点や差異がより明確になり、双方の史料群の性格やその成り立ちを究明することができる。

4. 研究成果

研究期間2年目に当たる2019年度末に新型コロナウイルス感染症の流行が始まり、移動や施設利用に関して大幅な制約を受けたことから、「3. 研究の方法」のうち重要な位置を占めていた敦煌文書および敦煌写経の原本調査を大幅に削減せざるを得なくなった。また各研究機関の一時的な閉鎖もあったことから、当初の研究計画から変更して実施した点も少なくない。各年度の研究成果は以下の通りである。

【2018年度】

当該年度は①を中心に研究を進めた。具体的には宝亀年間の史料群の整理・復原作業と、東大寺外に所在する奈良時代写経に対して東大寺写経所で書写されたかどうかを確定する作業である。前者については写真帳で筆跡を確認しつつ、主要な史料についてはおおまかな復原を終えることができた。また併せて、宝亀年間に書写された一切経群（先一部・始二部・更一部・今更一部）の基礎的な書写情報（書写担当者、校正担当者、料紙の枚数）の整理を完了させた。後者については、奈良県・京都府を中心に研究機関に出張し、また展覧会での原本確認を通じて、情報収集を行った。そこで得られた情報に基づき、奈良時代写経のうち画像が公刊もしくは公開されているものについては、資料を購入もしくは複写という形で入手した。また併せて、料紙の情報が公開されているものについては、法量および界線の規格などにかかる情報をまとめ、現存している宝亀年間に書写された一切経群のそれと比較できるように整理を行った。

②については、公刊されている影印をめくり、敦煌文書中の写経事業にかかる史料の特定までは完了した。

【2019年度】

当該年度はこのうちの②を中心に研究を進めた。写経の製作工程については日本の奈良時代写経および正倉院文書に基づく検討によりおおよその工程が明らかとなっている。しかし、日本の奈良時代写経は完成品が今日に伝来していることから、誤りや破損等に起因して料紙を破棄した事例（写経破紙）は遺品に含まれておらず、どのような基準で破棄されたのか、また破棄した後どのように処理するのかという点が不明瞭であった。この日本の写経破紙に相当するのが敦煌の兌廢稿であるが、敦煌写経は未成品も多く含むことから、この料紙の破棄について多くの資料を提供している。そこで、当該年度はこの兌廢稿を中心に中国国家図書館で原本調査を実施し、また中国および日本において写経破紙との比較、また日中の文書群・経巻群の比較に関する研究報告をおこなった。

また古写経は国内の博物館や美術館で広く所蔵され、特別展・企画展のほか常設展示に出陳されることも多い。前年度に引き続き、このような展覧会の場で原本を確認し、また図録や書籍の形で画像資料を入手することが可能なものは購入もしくは複写の形で情報収集に努めた。

【2020年度】

当該年度は、前年度と同様にこのうちの②を中心に研究を進めた。前年度に着手した写経破紙と兌廢稿の比較研究を継続し、現地での調査が難しい状況が続いていることから、オンライン公開されているデータベースを活用する形で対象を広げて関連史料を収集した。

また①との関りでは、これまで収集してきた資料に基づく成果の一部を、「安田文庫旧蔵奈良時代写経の検討」（『古代学研究所紀要』30、2021年）、「奉写御執経所・奉写一切経司奉請文継文の再検討―継文の整理と官司の在り方をめぐって―」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度―律令制・史料・儀式―』同成社、2021年）として公表した。

【2021年度】

当該年度は、まず前年度から引き続いて②を行った。一昨年度に着手した写経破紙と兌廢稿の比較研究は、引き続き現地での調査が難しいことからオンライン公開されているデータベースを活用する形で関連史料を収集した。これら収集した史料に基づいて投稿論文の準備をほぼ完了させた。さらに③に向けて、敦煌文書中の写経関連帳簿に関する史料にも対象を拡大し、収集と分析を進めた。

【2022年度】

過年度までに①は基礎的な作業は完了し、②の敦煌文書も公刊されている影印およびオンライン公開されているデータベースを活用する形で進めてきた。当該年度は③の両者に共通する写経関係史料であるという史料の分析を進め、写経の現場でどのような管理を実施していたのかという点の考察を深めた。

またこれとは別に、正倉院文書中の記載から存在が知られつつも東大寺写経所外で書写され

た経巻にかかる情報の収集および史料の閲覧を進め、東大寺写経所以外の場での写経の実際についても検討を行った。日本古代においては東大寺写経所のような官営写経所以外でも、多くの寺院や貴族個人の家で写経が実施されており、基本的な製作技法は大きく変わらないものの、細部で差異が認められる。帳簿は残っていないが、これら東大寺写経所以外の写経事業も現存する経巻を分析することで作業の一端を検討することが可能であり、正倉院文書の性格を検討する上での比較史料と成り得る。この比較を目的に特に藤原仲麻呂と関わるとされる経巻の情報を得ることができたことから、分析を進め、その成果の一端について口頭報告を行った。

以上、当初予定していた三年から五年に期間を延長して本研究課題に取り組むことで、古代日中の写経所の帳簿群と古写経について一定の成果と見通しを得ることができた。しかし、史料の閲覧や資料収集が思うに任せない状況が続いたことから、②中国の敦煌文書・敦煌写経の比較研究、③日中の写経事業の比較研究が手薄になった感は否めない。特に目下準備中の③は研究課題全体に関わる成果であることから、早期の公表を目指したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 史睿 著（波多野由美子・矢越葉子 訳）	4. 巻 31
2. 論文標題 敦煌写経の年代判定と書法史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古代学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 (1)-(21)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢越葉子	4. 巻 30
2. 論文標題 安田文庫旧蔵奈良時代写経の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 (51)-(67)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢越葉子	4. 巻 6
2. 論文標題 天一閣蔵明鈔本天聖令の文献学研究 作為唐令復原の方法之一	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 法律史訳評	6. 最初と最後の頁 169-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 矢越葉子
2. 発表標題 中日古代経巻書写 通過正倉院文書と敦煌文書の比較
3. 学会等名 “ 公元前3至10世紀東亜地区考古と歴史学研究 ” 中日学術論壇（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢越葉子
2. 発表標題 写経破紙と兌麈稿
3. 学会等名 正倉院文書研究会第38回定例研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢越葉子
2. 発表標題 藤原仲麻呂と写経
3. 学会等名 東北アジア文化学会・東アジア日本学会秋季聯合国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 古瀬奈津子編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 522
3. 書名 古代日本の政治と制度	

1. 著者名 矢越葉子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中華書局	5. 総ページ数 701
3. 書名 王振芬・栄新江 主編、旅順博物館・北京大学中国古代史研究中心 編 『絲綢之路与新疆出土文献 旅順博物館百年紀念国際学術研討会論文集』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------